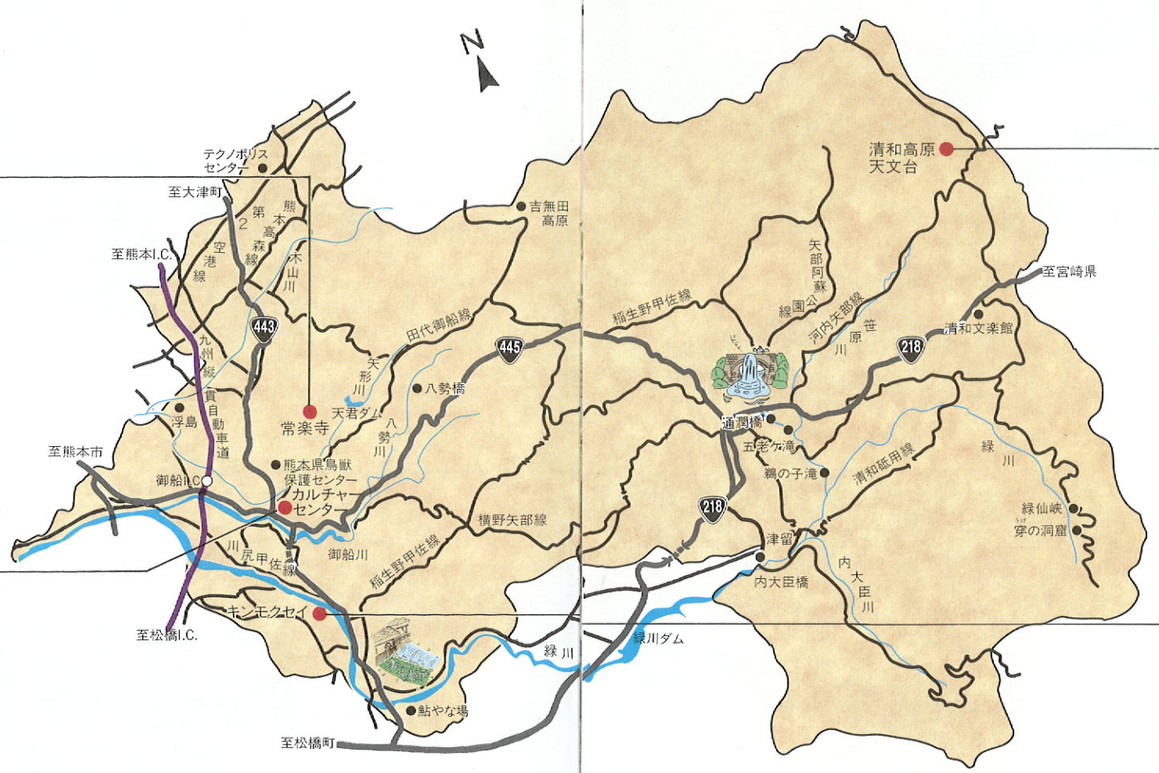
上益城

「飯田山常楽寺」
益城町北部にそびえる飯田山の八合目あたりに位置する。平安時代末期に開山されたといわれる。自然石で作られた山門への石段は"乱れ積法"と呼ばれる珍しいもの。

「御船カルチャーセンター」
町の文化向上と地域のふれあいの場として平成4年に完成。ホール、会議室、図書館などを備え、音楽会、演劇観賞、展示会など多方面に利用されている。また、天君ダム周辺で発見された大型肉食恐竜の化石のレプリカが展示されている。



「清和高原天文台」
スライディングルーフという独特の屋根により360°の観測が可能。口径50cmのニュートン式天体望遠鏡、屈折望遠鏡などを備えている。ビデオで清和村の紹介や天体の映像が放映されている。すぐ隣には宿泊用キャビンを併設。

「麻生原のキンモクセイ」
麻生原居屋敷観音の境内にデンとそびえ立つ。樹齢700年以上、高さ約18メートル。秋の彼岸頃と10月の中旬の2回にわたって花を咲かせ、その芳香は緑川の対岸まで漂う。国の天然記念物。

秋の風が緑仙峡の木々をそっと揺らす川面に落ちた木の葉が今、滑るように流れ始めた

川の物語を追って

川は大地をうねり海を目指す。谷を削り、田畑を潤し、石橋をくぐり、滝となり、他の川と出合いながら。川の流れに沿って旅は始まった。

▼水が生まれる洞窟

緑川の源を求めて清和村にある「緑仙峡」へ足を踏み入れた。村の特産品、椎茸の原木が林の中にチラホラと見える。急カーブを幾度かやり過ごし、小さなトンネルを抜ける。と、そこはもう緑仙峡の一部。紅、黄、茶、そして緑。十分に秋の雰囲気いっぱいだ。ヤマメが住む清流はフィッシングパーク、キャンプ場として整備されている。黒々とした口をポッカリと開ける「穿の洞窟」。肥後国誌にはこの洞窟から緑川が始まるとある。また、伝説によるとこの洞窟は日向の国まで続いているという。もし、本当にそうだったら…。川はそんなことには無関係だとばかり、目の前を流れていく。

穿の洞窟

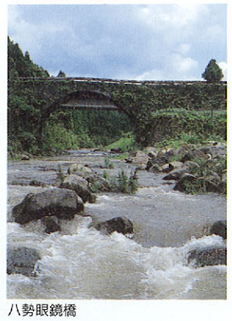
▼川が空中を舞う

笹原川が緑川に出合う直前、川が空中を舞う。林の中を歩くこと五分。岩が畳のように広がる河原が現れる。そこには小さな「燕滝」がある。更に先へ行くと、高さ五十メートルの「鷹滝」の落ち口。縁のギリギリで足を踏ん張り下を覗く。今まで支えてくれた地面が突然なくなった水は、ただ真っ直ぐに潔く滝壷に吸い込まれていく。「鵜の子滝」はそこから遊歩道を八百メートルほど行った先から見える。高さ三十五メートル。滝までの道が険しいのと、気付きにくい場所にあることから別名〝幻の滝〟。水は三度白い柱に姿を変えた後、緑川と合流する。

鵜の子滝

▼先人の気持ちが組み込められた石橋

この地域にはたくさんの川が流れる。人々は必要に応じて石橋を築いた。御船町の八勢橋もその一つ。全長六十二メートル。長い年月が苔となってビッシリと表面を覆う。橋を渡った先には、昔、日向街道だったという石段が山の中へと続いている。この谷底は街道の難所であったという。そこで、御船の豪商 林田能寛が私財を投げうって石橋を架けることを決意。住民の協力もあって、わずか四カ月で完成した。現在は、すぐ横にコンクリートの橋が架かり、難所だったという面影はない。改めて石橋をまじまじと見る。一つひとつの石が能寛と住民の気持ちのようにガッシリと組み合わさっている。そっと石に触れてみる。掌にかすかな暖かみが伝わってきた。



八勢眼鏡橋

▼いつまでも水は湧き続ける

水の上にポッカリと神社が浮かんでいるように見える。ここは嘉島町の「浮島さん」こと浮島能野座神社。不思議なことに洪水になっても境内がつかることはない。澄んだ湖底のいたる所から水が湧いている。水温は年間を通して約十八度。一日の湧水量は十五万トン。鳰、フナ、ハエ、コイ…たくさんの生き物が棲む。昔、この一帯は田畑ができない湿地だった。ある日、神様が夢枕に現れ、ここに池を掘るよう告げられた。そこで、この地を掘ったところ、水が全部集まって池となり、周辺は水田や畑が作れるようになったという。人々は感謝してこの神社を建てた。九百年以上も前の話だ。「浮島さん」のお蔭でできた田では稲穂がそっと秋の風に揺れていた。

浮島さん

▼悠々と川は流れる

目の前を緑川がゆったりと流れていく。川は田畑を潤し、同時に物語を生み出してきた。伝説、滝、石橋、神社…。それぞれに姿を変えて受け継がれていくことだろう。この川が流れ続ける限り。